

高大連携事業 信州大学教育学部現代教育コース 異文化 間交流ユニット 小池浩子先生の講演会とワークショップ開催

高大連携事業の一環として小池浩子先生（信州大学教育学部 現代教育コース 異文化間教育ユニット）に1月17日おいでいただきました。先生から2年生の国際教養科対象の講演会と、午後は1年生国際教養科クラス対象に、小池先生が指導するゼミの学生2名が主導するワークショップが持たれました。講義の内容は以下の通りです。

講演会では、「コミュニケーションを高めるには人を理解すること」という原則から、単に英語ができるとか、外国語ができるというレベルを超え、現地のことばを語り、現地の人々と交流を重ねることの意義があり、それが人生の糧となる。日本社会は、日本語というお互いがあまり語らなくても、敬語の使い方が厳しく使い分けられて、互いの意思疎通が可能という曖昧な空間である。しかしながら、多くの国々ではそれが通じない。

大学で国際関係学を学ぶ学生や、本校の国際教養科で学習する生徒のなかには、国連職員になりたいという希望を持っている人も多いはず。実際のところ、国連は日本人の職員を今求めている。他者の違う考え方を許す寛容な日本人が、世界で多く求められていることを知っておいてほしい。

3年生になろうとする今、なぜ国際教養を学ぶ意義があるかを再度、問うてみる必要がある。開発教育を学ぶことから、途上国の行き過ぎを抑えるために何ができるかを考えることが重要。

異文化を学ぶ人は、ユネスコ憲章「戦争は人の心に平和のとりでを築く」を再び想起して、世界の人々がお互いに「考え方の違いを認めること」から始めねばならない。

その実際の方法論として、相手に質問を重ね、理解した内容をパラフレーズしつつ、重要と思ったことはしっかりメモを取る。そのためには、積極的にリスニングをする習慣を身につけ、自分の言葉で説明して、理解した内容を、自分の独自の絵を描けるようになることだ。

そのためにも、DIEメソッドが求められる。
DIEとは、「description interpretation 相手の立場に立って理解 evaluation を行わない」を意味する。

午後は、同大学学生の築島さんと松本さんが、インストラクターとして、貿易ゲームを実際に行いました。貿易ゲームとは、紙（資源）や道具（技術）を不平等に与えられた複数のグループ（国家）の間で、できるだけ多くの富を築くことを競う、貿易のシュミレーション・ゲーム。
（右の写真はその準備をしています→）



同じルールの下でも、あらかじめ不平等な初期条件を設定しておくことで、豊かなグループはより豊かに、貧しいグループはより貧しくなるというように、経済格差が拡大していく仕組みを、現実の自由貿易システムと対比しつつ体験的、共感的に理解することを目的としています。

生徒たちは6名のグループを作り、積極的に活動に取り組み、大盛況のうちに、世界の経済格差の現実を学ぶことができ、大変有意義な時間を持つことができました。

信州つばさプロジェクト 県企画プログラム「SDGs 探究コース カンボジア派遣」に国際教養科から2名参加

2年国際教養科の田幸未来さんと、1年国際教科の荒井ふみなさんの両名は、2月県教委主催の信州つばさプロジェクト県企画プログラム「SDGs 探究コースⅡ」でカンボジアを訪問しました。2年の田幸さんからの手記を紹介します。

私は、戦争の歴史を学びたい、自分の将来に繋がるような選択肢を見つけたいという思いがあり、この研修に参加しました。現地の高校生とのグループワークや、ポルポト政権時代の残酷な歴史が刻まれている虐殺博物館への訪問、世界遺産であるアンコール・ワットの観光など、とても貴重な体験ができました。

また、カンボジアが抱えている問題（教育面、衛生面、地域格差など）を解決するために、現地で活躍している方々のお話を聞いて、私も彼らのように問題解決に貢献したいと強く思いました。

この研修で学んだことを風化させないために、これからも積極的に情報を共有いくことの重要性を認識しました。最後に、企画・運営に携わってくださった全ての方々、この研修を通して出会った仲間たち、最高の時間をありがとうございました！

